

僕は、
字が読めない。
(3)

小菅宏

集英社インターナショナル
ウェブ立ち読み

強迫観念と苛立ちの日々

欧米ではLD（学習障害）を持つ子どもは「自分は先天的に中枢神経系に少し障害がある」という事実をあまり隠さないという。LDなどの障害に対する知識が社会的に広まり、障害を發見し、サポートするシステムが構築されているからであろう。

その欧米では早期發見、早期特別支援が徹底している。米国ではLDのある生徒のほとんどが通常の小学校・中学校・高等学校において、一般の学級を基本に支援教育が受けられる。このような対応の背景には、LDを特別視したり、蔑視しない、いわば「多様性に対する寛容さ」があるのではないかと思われる。

「僕はなぜ他人と違っているのだろうか」という思いはまだまだ重荷でしたが、そんなある日、そもそも自分自身がつねに「なぜ」と思っていることに問題があるのだと思いはじめました。他人と異なることへの自己嫌悪こそが、自分を苦しめているのだと気づいたのです。でも、だからといって苦しみがなくなったわけではありません。

当時の僕は、四月からの新しい環境への希望と不安が胸のなかを行き交っている状態でした。生活が変わることで気持ちも前向きになれるのでは、という期待と、はたして新しい学校で人間関係を上手く築けるだろうか、また元の木阿弥もくあみに戻るんじゃないかとの二つの感情が激しく交錯こうさくしていました。

四月一日（月） 午前に六日町へ行く。学校（県立六日町高校）で友人と会い、昼食を一緒に食べるためにバイクで向かう。疲れたらしく五十沢（母の実家）の家へ寄る。夜になり、迎えに来てほしいとTELあり。迎えに行く。

四月二日（火） 薬を服用すると（体が）だるい、と言うので翌日（四月三日）からまったく飲まなくなる。

四月八日（月）（県立長岡明德高校定時制の）転入学許可式に、お父さんと一緒に車で行き、参加。

四月九日（火） 朝は新幹線で、帰りはN君と上越線で帰宅。

四月一〇日（水） 登校する。体力的に疲れるようだが、気分はまあまあの様子。

四月十一日（木）（明彦は）六高（県立六日町高校）に顔を出し、大塚先生、保健の若井先生と話してくる。

四月二三日（土）～一四日（日） 家でゆったり過ごす。庭で智子（明彦の妹）とバドミントンを
する。二人とも楽しそう。

四月二五日（月） 授業はまだほとんど自習。午後になって帰宅。少しずつ体を動かす。

四月一六日（火）（明彦は）六高のテニス部へ顔を出す。

四月一七日（水） 授業が少しずつ始まる。夕方帰宅。部活（バスケット）を見学してきたとの
こと。

四月一八日（木） 学校から帰ってきてから、少しテニスをし、またバイクで出かける。

当時の僕の足は五〇ccのバイクでした。黒いバイクのハンドルを握り、風を切って走る
爽快感は僕の灰色の心を解放してくれる気がしました。バイクと一体となると、自分には
何も苦しみがないかのように錯覚しました。国道を走りながら、このままどこか見知らぬ
世界へ飛んで行けたらいいのに、と思ったりもしました。誰も僕のことなど知らない大都
会会なら、この曖昧とした不安と恐怖が解消されるのではないかという甘い幻想も、バイ
クを飛ばしていると抱けました。

四月二〇日（土）～二二日（日） 家の手伝い（農作業）。

四月二日（月）～三日（火）（気分が）だるいと言って、学校を休む。

四月二日（水）～二六日（金） 学校へ行く。二六日にテニス部に入部。

四月二七日（土）～二九日（月） 祝日）トラクターに乗り、田植えをする。

四月三〇日（火） 胸が苦しくなると言って帰宅。どうやら学校に行つてない。

五月一日（水）～一六日（木）（明彦は）登校しない。家でゆったり過ごす。

三年生として転入した高校（県立長岡明德高校）は長岡駅のすぐ近くにあり、定時制でしたが授業は昼間に行われました。この新しい環境に早く慣れたいと、バスケット部やテニス部のクラブ活動の様子を見学に出向きました。身体を動かすことが好きな僕にとって、運動部に所属するのは気分転換になると思つたのです。とりあえず、経験のあるテニス部（中学時代は硬式）に入部届を出しました。

しかし、転入の日から僕の心を落ち着かない状態が占領していたことと、自分が思い描いたような部活動ではなかったこともあり、学校から自然に足が遠のきました。自分でも授業への情熱が冷めて行くのが分かりました。その最大の原因は、級友たちのほとんどが高校卒業資格の取得が主たる通学と思ひ知つたからで、僕のように大学進学を考えているのは少数派だったのが分かつたからです。

転入して一か月足らず、ゴールデン・ウィークの直前に、過呼吸の息苦しさに襲われて不眠になり、学校へ行く意欲が失われるのを抑えられなくなりました。過呼吸は新しい環境に馴染ま^{なじ}ない対人恐怖に似た症状の緊張のせいだと知りましたが、どうしようもありません。そこで気分転換のために、折しも雪も消え、清々しい風が吹き渡る気分の良い田植えの季節だったので、地方公務員の父が休日に行う農作業を手伝いました。トラクターを操縦したりしたことを覚えています。

五月二七日（金） 分家羽田屋^{はねだや}の叔父さん（父方祖父の弟。明彦を可愛がる）が山菜取りで崖^{がけ}から落ちて亡くなる。

五月一九日（日） お通夜。

五月二〇日（月） 葬式。（明彦は）気を遣^{つか}ってよく動く。

五月二一日（火） 三日間（の葬儀手伝い）で疲れたのか、またイライラ。

五月二二日（水） イライラが募^{つもの}る。薬も病院も嫌がる。

五月二三日（木） 午後、病院へ連れて行こうとしたら、家から出た^でくなくいと嫌がる。夜は少し落ち着く。

五月二四日（金） 午後、長岡の〇心療クリニックに予約していたので行く。年配の先生だった

が、今までとは違う薬で治療を始めてくれる。本人も悪い印象は持たなかった。

五月二十五日（土） 午前中は部屋にすることが多い。夕方、TVを観て笑ったりしている。夜、友だちから誘いがあり、出かけて、翌朝、戻ってくる。

五月二十六日（日） 薬を飲み、午前中眠る。

人の死はシヨックです。しかも近親の死となれば心穏やかではありません。僕は二度の自殺未遂の体験があるので、度々、「人の死」について考えます。人はどうしてこの世に誕生するのか。最近になってですが、人の誕生には何か意味があるのではないか、と思ったりもするようになりました……。

僕には死に関して強い記憶があります。中学（町立湯沢中学校）のときの親友の死です（後述。七月六日の記録参照）。テニス部で一緒だった彼がバイク事故で亡くなったのです。人間って、こんなに簡単に存在を消してしまうのか、と呆然ぼうぜんとなりました。僕が生まれる数年前、自殺した親戚がいたことを後に知ったときも、その衝撃で落ち込みました。

羽田屋の叔父さんの葬儀に参列して、なぜ自分だけ生きていられるのか、生きることの意味があるのかと考えてしまいました。しかし、自分が生きていられるということには何かの意味があるのではないかと思ったりもしました。誰かが僕に「おまえは、生きること

にもっと前向きになるべき」と告げているのではないかと思ったりもしたのです。

六月一日(土) 午後通院(〇心療クリニック)し、同じ薬を二週間分もらって帰ってくる。

六月二日(日)〜二四日(金) 学校は行かない。薬は飲む。

六月二五日(土) 午前、畑に行ったり、羽田屋に行く。昼頃、疲れたようで通院を嫌がるが、智子と二人で長岡に行き、薬をもらって来る。次を一九日に予約してくる。

六月一九日(水) 一二時が予約だったので、(職場の)休みをとって一緒に行く。薬が変わった(昼・ソラナックス/レキソタン。夜・レンドルミン)。

渡された薬を服用すると思考回路が乱れ、効果が切れた後はボンヤリして苛立つたり、身体が上気したりしました。薬に頼ることに疑念を抱き始めた頃でしたが、明日を生きたいために、まず今日を精いっぱい生き抜こうと決めて、薬を飲みつづけました。

そんな中で、妹の智子と一緒にいると気分が和みました。母親に似ておっとり型の智子が、ゆっくり喋ってくれるのも僕には聞きやすくて、滑らかに会話が成りたちました。僕と接するとき、いろいろな仕種に僕への自然な優しさが伝わります。「他人に神経を遣いすぎる」と妹に指摘される僕ですが、ほかの人もこんな気安い関係が結ばれば良い

のに、と思ったりしました。

僕は今でも屋外での会話には苦勞します。相手の声を聞きとろうと集中するので、それ以外の余分な雑音も拾ってしまい、逆に意味が読みとれないときがあります。例えば、発音の似た単語（「足」と「箸^{はし}」）を聞き分けるのが困難なことがあります。自分の工夫で会話を成立させなければ、と思っっています。

六月二〇日（木）薬のせいかイライラしている様子。夕方、〇心療クリニックにTEL入れる。相談したところ、前のカルテが手元にないので元の薬に戻し、飲ませたらとのこと。

六月二一日（金）午後もイライラ。部屋の壁を殴る。昼にまたクリニックにTEL。夕方は落ち着く。薬は、昼はソラナックス、レキソタン。夜はレンドルミンを飲むことに。

六月二二日（土）羽田屋の四十九日法要。朝は落ち着く。（明彦が）お墓に納骨のとき手伝いに来る。

七月一日（月）（明彦が）一人で長岡へ行く。薬が変わる。デパス（二日三回）とデプロメール（二日二回）。

七月六日（土）同級生がバイクで亡くなる。

七月七日（日）（友の死の）ショックで様子がおかしい。

七月八日（月）（自分には）何もできないとイライラする。夜、デパスを飲み、少し落ち着く。お通夜に一緒に行く。

LDやADHDなどに対する薬の効果については専門家の見解が必ずしも統一されていない。米国ではADHDに「リタリン」という薬が多く処方されるがこれも決定的な治療法とは言いがたい、のが現状だ。むしろ、「リタリン」など薬物治療に偏向する姿勢を懸念する精神科医などは多い。薬剤は補助手段だと認識し、個々の状態に応じての指導プログラム、さらには周囲の人の理解、また彼らを受け入れる社会的土壌の整備こそ重要、と指摘する人は少なくない。

七月九日（火）～一七日（水） この時期、ゆったり過ごす。

七月一八日（木） アルバイトをしたいと言い、自分で探す。越後中里なかざとのリゾートホテルの客室清掃をすることに。

七月二二日（月）～二三日（火） バイクに乗ってバイトに行く。食欲がないのが気になる。

七月二四日（水）～二六日（金） バイト三日間休み。友だちが新潟から泊まりに来る。（帰ると）気を遣って過ごしたのか、少し寝不足なのか、イライラ。デパスを飲む。

僕は夏が嫌いです。この季節になるとなぜか自分で自分を抑制することがむずかしくなるからです。それに加えて、薬を服用するようになって吐き気を催し、なひたひ度々、食欲不振と眠気に襲われました。薬が切れると神経過敏となり、気持ちすさが荒む感覚に陥りました。

夏休みに入りましたが、二学期以降、高校（県立長岡明德高校定時制）へ通う気力は残っていませんでした。心のモヤモヤが全然、消えなかったからです。どうしてなのだろう、
と思い、自分の身体の機能に問題があるのかも悩むようになってきましたが、その段階では具体的に何も分かりませんでした。

本来、外向的な性格の南雲にとって、部屋に引きこもっているのは耐えられないことだった。「何かしなければ自分が自分でなくなる」との強迫観念に悩まされ始める。その感情は自己否定にも通じてしまう。定時制と言っても昼間の生活だが睡眠が浅く感じられ、朝起きても熟睡した気がしない。朝の南雲はいつも身体が硬直している状態だった。

悪夢は見ませんでした。むしろ強迫観念めいた不安に脅かされるようになっていました。手洗いのことです。一度、自分の手が汚れていると思うと、徹底的に洗わないと気が済まなくなりました。一日の洗浄の合計は平均一時間。一回五分から十分間、水洗いをしま

した。石鹼せっけんを使わないのは泡が洋服に飛んだりすると、新しい洋服に着替えないと気が済まなくなるからです。自分が異常に神経過敏になっているとは気づいてはいるのですが、自分の鼻や唇くちびるすらも触れられませんでした。鼻や唇に触ると、また手が汚れたような気がして、徹底的に洗浄しないと気持ちが落ち着かないからです。

こんな具合に部屋に閉じこもって自分と向き合っているのにも疲れたので、外へ出てみようと思ひ、バイトを決意しました。

南雲のアルバイトはホテルのベッドメイキング、窓拭き、ゴミの整頓、備品整理などだ。バイトに没頭していれば、心の苦痛を忘れていられるかと思つたのである。

七月二十七日（土）～三二日（水） 朝は落ち着く。バイトに行く。バイト時間は午前一〇時から午後五時。

八月一日（木） ようやくバイトが二日休みになり、長岡の〇心療クリニックへ行く。一か月分（二八日分）の今までと同じ薬をもらってくる。

八月二日（金） バイトに行くが、午後になり三七度の熱と吐き気で帰ってくる。町の診療所へ行き、風邪薬をもらってくる。夜、早目に寝る。

八月三日（土） 熱が下がりバイトに行く。バイトの時間は午前八時〜午後五時。一日何とか働いてくる。疲れた様子。

八月四日（日）〜五日（月） 午前八時〜午後五時バイト。

八月六日（火） 午前一〇時から午後五時までバイト。（明彦は）お父さんとラーメン屋で夕食を食べる。

八月九日（金） バイト休み。夕飯を一人で近くの食堂で食べ、塩沢のバイト仲間とサッカーをする。

八月一二日（日） 昼頃、バイトから帰ってくる。吐き気がしたとのこと。疲れが溜まったのか。
八月一二日（月）〜一三日（火） バイト休む。イライラしている。「みんながやっていることが、どうして自分にはできないのか」と言う。

バイトがつづかなかったのは、「仲間が簡単にこなしている作業が僕の手には負えない」という現実の壁を実感したことにありました。なぜ自分だけできないのかという屈辱感。なぜ僕だけが、こんな苦しみに遭わなければいけないのかという憂鬱ゆううつ。学生時代に感じていた「他人との違い」を、バイトではあったけれども「大人の世界」からも突きつけられたと思いました。

簡単なバイトでも自分の居場所がないことを実感させられたことの衝撃は深かった。仕事そのものは体力的な負担もそれほどないのに、他の仲間とは異なり、ちゃんとこなせないためにバイト仲間^{ひら}に卑屈^{ひく}になる自分が嫌でたまらなかった、とも告白する。

だが、「みんながやっていることが、どうして自分にはできないのか」と母親に愚痴^{ぐち}つたことがきっかけになって、物事が少しだが前進しはじめる契機となる。

八月二四日(水) 朝早く、バイト先へ行き相談してくる。病気のこと話してくる。一応、午前一〇時から午後三時まで、残り五日間続けてみようということにしてくる。自信はあまりないと言うがバイトに出かける。

八月二五日(木) (バイト先に)話を聞いてもらったことで安心したのか、また元気になりつつある。午後三時に帰ってくるので昼食は持たずに行く。

八月二八日(日) ～ 二九日(木) 午前一〇時から午後五時(たまに午後六時)まで仕事をしてくる。
八月二三日(金) 一時間働いた後、下腹部が痛み休む。

八月二四日(土) 午前中に、行きつけのN病院が休みなので、Aクリニックへ行き、診てもらふ。少し、微熱がある。腸の炎症^{えんじやう}だろうからと整腸剤と抗生剤をもらってくる。盲腸ではないだろうとのこと。午後^{ごご}にまたバイトに。

八月二十九日（木）　バイト午前一〇時から行く。

バイト先に僕の症状を母が説明してくれたことは、僕にとって劇的な前進につながりました。むろん、当時は「ディスレクシアだとは僕も母もまったく知らなかったので、「神経を遣いすぎて疲れやすい体質」程度の説明だったのですが、それでも自分の実情を家族と医師以外の人に告げるのは初めてのことでした。ことさら隠してきたつもりはなかったのですが、自分の現状を知ってもらったことで僕は少し救われ、何となく安心する気持ちになりました。

当時、専門家から読み書き困難のLDだ、と早期に的確な診断をされていれば、南雲のイライラも違った形になっていたかもしれない。

ただ、本人と家族しか知らない苦しみに関して、医学的に正確ではなかったにせよ、ともかく外部に告げた事実、南雲にとつての新たなページをめくる第一歩になった。

九月二日（月）　（明彦は）長岡の心療内科Nクリニックへ行く。帰りに県立長岡明德高校へ行き、大検（大学検定）の話や専門学校の話をし、一一月に試験があると聞く。

九月三日（火） 専門学校などのことを自分で調べている。

九月五日（木） 六高（梶立六日町高校）に相談に行く。

九月六日（金） 公民館で受験勉強をする。

九月七日（土） 五十沢へ泊まりに行く。

九月八日（日） 五十沢から帰ってくる。ピアノ教室へ行く。

九月一日（水） いろいろと考え始め、少し疲れた様子。

九月二三日（金） 買い物に行く（ベッドやMDコンポなど）。

九月一五日（日） （明彦が選んだ）ベッドが届く。

九月一六日（月） 勉強をするとイライラすると言う。（体の）調子が悪いようだ。

九月二一日（土） 稲刈りの手伝いに、（明彦）本人は手伝えないことに苛立^{いらだ}つ。

九月二二日（日） 午後から部屋で眠るがイライラがひどい。

九月二三日（月） 朝は体調がいいが、夕方がやはり良くない。デパスが少なくなる。

九月二四日（火） 薬がなくなるので、長岡の病院へ行かなければならないのだが、本人は行く

気になれず、代わりに行く。午前十一時に家に帰り、午後三時に職場に戻る。

九月二五日（水） 他人と会いたがらないが家では落ち着く。

その頃、ときどき近くのピアノ教室へ気晴らしに通いましたが、長つづきはしませんでした。結局、僕はバイトにも出ずに三階の部屋に閉じこまりました。奇声を発することもなかったのも、母は一段落したのかと思つたでしょうが、その頃の僕は何時間も自分自身と向き合い、何時間も自分自身を見つめていました。「なぜ他人ができることが自分にできないのか」との劣等感が、僕の神経を細い針で刺すように間断なく傷つけていました。「絶対に何か僕には特別な原因があるにちがいない」とその頃になつて確信するようになっていました。でも、もちろんその答えはまだ分かりません。

ところで、家に引きこもつていれば客が来ます。地方なので玄関の鍵を掛けるという習慣はなくて、顔見知りならば勝手に出入りします。来客があつて、「誰か居ますか」と声をかけてきても、僕は自分の部屋に引きこもつたままで、返事などできません。ましてや顔など出せません。それでも親類や知人は鍵が開いているものだから、どんだん家の中へ入つて来ます。

そして僕が部屋にいるのを見つけては、「なんだ、居るんじゃないか」という妙な顔をします。家族と身内（祖父母）以外は、いくら親しい人でも僕の症状を知りません。誰も顔を合わせたくない僕が、無愛想ぶあいそうな対応をしたのは言うまでもありません。

南雲にとつては将来への不安が解消されない時期であり、苛立ちの原因が何かを突き止めた
い気持ち有一段と強く湧いていた。だが南雲自身の現実には孤独であり、陰鬱な気分いんうつに耐えきれ
なくなると知り合いに会いたくなくなったが、狂気じみたものが自分から垣間見えてしまうのでは
ないかとの錯覚に襲われ、慄おそき、結局は引きこもつた。

一〇月一日（火） 午前一〇時頃、バイト先から手伝ってほしいとのこと。（明彦）出かける。
午後三時頃、帰る。

一〇月三日（木）（町立湯沢中学校の）テニス部の食事会があるとの連絡。行けそうもないと話
すが、まだ断っていない。

一〇月四日（金） 先日のバイトの手伝いの緊張の疲れからか、イライラが増す。家の椅子を蹴
飛ばす。智子にも当たる。〇心療クリニックにTELして相談する。疲れやすいのだから無理
に人と会ったり、バイトも良くないし、（本人が）好きなように過ごすのが肝心とか。

一〇月五日（土） 金曜日になるとイライラして体調が悪いと言う。土曜と日曜が嫌らしい。休
日は外へ行つても人が休んでいるし、家にも家族がいるからだという。人と会うのが嫌なので
仕方ない。

一〇月六日（日）～二日（金） 外出しない。家で過ごす。（テニス部の）食事会が近づき（精

神的に)負担になっているようだ。

一〇月一八日(金) 食事会の当日。行きたい気持ちはあるが、体がついていかない。胸が苦しいと言う。心臓がドキドキするときは暗い部屋で深呼吸するらしい。どこにも行く気がしないという。病院に行けない。人込みが嫌だと言う。電話もイヤ。メールは緊張しないのでOK。(食事会へは)薬を飲んでから行くかと聞くと、胸が苦しくなったらしい。結局、行かないことに決め、落ち着く。気持ちは行きたいが体が拒絶している。たぶん、行っても話をせず、イライラするだけだと思う。(明彦の)体と心がバラバラ(になっていると思う)。

(明彦に気が付いたこと)

- 一・文字を読むとイライラ立つ。
- 二・同級生と上手に話すことができない。
- 三・電話をするのも嫌だ。
- 四・胸が苦しくなつてドキドキする。

自分の苛立ちの原因を確かめたい気持ちが芽生える一方で、いまだに親とも話したくないし、友だちと会話するのを厄介ちがひに感じ、電話口で喋るのも億劫おっくうな日常。以前とは異なり、同級生と

の会話で冗談が言えなくなっていると自己確認しはじめる。変質した己と葛藤し、対峙した時期だ。ただユニークなことに、対人恐怖の症状はあってもメールだけは気にならなかったという。

(メールが平気だったのは) 向かい合って話すのと違い、緊張せずに済むからです。それにメールなら文字も大きめに設定すれば読みやすくなるし、電話なんかと違ってすぐに返事をしなくても済みます。中学の部活の大会で知り合った女子のメル友もできたのですから。しかし、活字を読むと神経が逆撫でされ、頭の中が混乱し、吐き気を催して心臓の鼓動が異常に強く感じる度が度々ありました。母もこの頃は僕の異常の原因に気づいたみたいで、以前よりも僕の行動を注意深く見つめるようになった気がします。僕が「ディスプレイの典型的な特徴」を意識しはじめた端緒です。

一〇月一九日(土) 少し落ち着くが外出は嫌だし、病院にも行きたくない(と言う)。(父方の)祖母が帰宅。(明彦と)話をすると行って部屋へ行ったみたい。

一〇月二二日(月) 午後から休みをもらい、病院へ薬をもらいに行く。

十一月一日(金) 今週あたりから昼間、ちょっとだけ外へ出るようになる。めずらしく羽田屋

へ行ってくる。

一月八日(金) 昼頃、イライラが募^つっているようだ。午後、クリニックへTELする。診察が終わる頃に連絡を入れてくださいと言われ、午後六時三〇分頃TELするが、まだ診察中で、終わってから先生からTELをくれる。通えないならY病院(新潟県浦佐^{うらさ})へ行ってみたらと言われ、通院の回数を増やしたらいいとのこと。

一月九日(土) 午前中、またイライラ爆発！ 昼、ラーメンを食べ、薬を飲む。午後二時頃、顔色も快方に向かい、少し落ち着く。Y病院のことを中里の角谷さん(保健士)に聞く。(明彦は)ケーキを食べる。

一月一〇日(日) 朝は昨日より気持ちは落ち着くが客の出入りがあり、少し嫌がる。畑の仕事があり、その後に(明彦の)顔をあまり見ていないが、夕方にイライラ。

一月一二日(火) Y病院にTELしてみる。火・木・土とやっているが、火曜日と土曜日は医師が代わるとのこと。木曜日なら同じ医師であるとのこと。やっぱり長岡の〇心療クリニックがいいと考える。

僕は落ち着かない時間に流されて、家族と顔を合わせても苛立ち起こるし、家に客が訪れると一種のパニック状態になり、身の置き処^{ところ}を見失ったようにうろたえました。「こ

こは僕の家のなに何で他人がいるのか」という戸惑いと怒りです。僕のそうした苛立ちをもっとも近くで見ている母に、僕は暴力をふるうこともしばしばありました。でも、「本当にこれでいいのか」と思う心も次第に強くなりました。

この時点の南雲は、暴力や悪口という形で、一方的に自分の思いを投げかける手段しかなかった。そんな行為でしか南雲は「自分が生きている」ことを確認できなかったのだろう。

ところで取材途中で巡り会った『病の起源 2』（NHK出版）の、第一章「読字障害」に「のちに私たちは文字を発明し、高度な文明を築き上げてきた。／しかし、その陰で、人間本来の大切な能力を失ってしまったのではないか。／読字障害は、そう私たちに問いかけているかもしれない」の一文が記されている。これはディスプレイアについての的確な示唆と指摘であると思う。

僕は、字が読めない。 小菅宏著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,500 円（税込）
ISBN 978-4-7976-7193-3

ウェブでのご注文は [こちらにどうぞ!](#)